

天文学とプラネタリウム

第91回



今月のお題

東京国際科学フェスティバル



「地域の絆を世界の絆に」「科学を文化に」をモットーに行われた科学祭。より参加しやすい科学イベントにするには、いろいろな視点が必要です。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台ALMA推進室)

科学に触れる、科学を楽しむと聞いて、皆さんはどんな「場」を思い浮かべるでしょうか。科学館やプラネタリウムという施設が浮かぶ方もいれば、本誌のような雑誌や書籍、あるいはテレビという方もいらっしゃるでしょう。最近では、飲み物片手に科学に関する話題を楽しむ、サイエンスカフェも各地で開催されるようになりました。研究機関や大学が開催するサイエンスカフェもありますが、科学の話を楽しみたい、議論したいという専門家ではない方が主催するカフェも多くあるようです。

そんな科学に関するイベントをつなげ、さらに多くの方が参加できるようにするとともに多くの方がいっしょに科学にイベントを作り上げていく機会をつくろうと、各地で「科学フェスティバル」が開催され始めています。函館と東京では2009年から、愛知や千葉でも今年からはじまったようです。東京で開催された東京国際科学フェスティバルは、国立天文台三鷹のある三鷹市を中心に東京都内や近隣県で様々な場所で行われており、特に三鷹市では「みたか太陽系ウォーク」という企画に

市全体が参加しています。これは、13億分の一のスケールにした太陽をJR三鷹駅に置き、そこから同じ縮尺で水星から冥王星までの軌道を三鷹市全体にあてはめているものです。その軌道近くに位置する公的機関や商店には、それぞれの惑星のスタンプがおりてあり、全体としてはスタンプラリーとして各地を回ることができます。特に宇宙に関連しない普通のお店にもスタンプがおりてあり、そのお店の方たちや常連さんにも自然な形で科学フェスティバルに参加することができます。天プラでも、丸の内での天体観望会を科学フェスティバル登録イベントとして開催しました。

科学関連イベントを開催してもそもそも集客力が弱かったり、新しいお客さんにも来てほしいのに固定客に限られたりと、なかなか上手くいかないことも多いものです。そこを打開するには、やはり参加者や普段科学にあまり触れない人たちの視点を取り入れること。天プラでも、子育て中のお父さんお母さんのネットワークに入れてもらって「どんな場所・時間なら参加しやすいか」を提案してもらったり、美術館や飛行場で天文関連イベントを開催して新たな協力



クロージングイベントのブース出展エリア。化学結合をテーマにしたカードゲームや科学絵本など、大人も子供も楽しめる企画が並んでいました。著者(平松)は国立天文台ALMA望遠鏡ブースを担当。

関係を模索するとともに新しい来場者層を開拓したりしてきました。東京国際科学フェスティバルが標榜する『科学を文化に。』というキャッチフレーズは、科学を生業とした人や一部の愛好者だけではなく多くの人を巻き込んで行こうとしている点で、天プラのやってきたことと同じ方向を向いているといえます。科学に興味を持ってイベントに参加し、さらに関心が深まって自分たちでイベントを企画する。各地で行われている星まつりにも、そういった経緯をたどってきたものも多いと聞きます。多くの人と楽しむのもっと楽しい。科学のそんな楽しみ方がもっと広がるといいですね。